

スリランカにおける供養 (pūjā)

柏原信行

スリランカは、テラワダ仏教国の一つである。テラワダの在家仏教徒には布施が重んじられていると言われる。事実、テラワダ仏教国の中には、比丘や沙弥などが毎早朝托鉢を行ない、在家仏教徒が彼らに施食を行なっている国々もある。しかし、スリランカでは、日常的な托鉢は、現在殆んど行なわれてはいないと言ってよい。一部の寺院の僧や、特定の壇家のある寺には属さぬ乞食僧が、鉢を携えて行なう例もあるが、現代のスリランカでは稀であろう。一般寺院には、それぞれ所属する壇家や信徒がある。日本のように制度化されていないが、富裕な壇家が当番を決めたりして、寺院や沙弥の食事を賄っているようである。

寺院の食事を賄っている在家仏教徒は布施を行なっている訳であるが、他の一般在家仏教徒にとっては、日常的な布施はない。

現代スリランカの在家仏教徒の、布施にかわる行ないは供養 (pūjā) であると言えよう。

この供養には、支提供養 (ceṭiya-pūjā 塔供養)、菩提樹供養 (Bodhi-pūjā)、仏像供養 (Buddha-pūjā) の三種がある。この三種は、支提の三種、即ち舍利支提 (sārikā-ceṭiya)、受用物支提 (paribhogika-ceṭiya)、象徴支提 (uddesika-ceṭiya) に由来する。スリランカ仏教においては、支提 (ceṭiya) と言えば一般的に舍利支提を意味する。受用物 (paribhogika) とは仏陀の受用した衣鉢等であるが、菩提樹も亦仏陀が悟りを開くために受用したものの一つであるので、スリランカでは特に菩提樹を受用物支提とし、菩提支提 (Bodhi-ceṭiya) と呼ぶ。象徴 (uddesika) とは、仏像出現前には、菩提樹や法輪が仏陀の象徴であったろうが、スリランカではこれを像支提 (pāṭṭipā-ceṭiya) として仏像に限定している。こういう訳で、スリランカ

仏教徒は、寺院に参拝すると先ず塔に礼拝し、次いで菩提樹に、そして仏殿の仏像に礼拝し、最後に寺院内の神祠の神像にこれらの礼拝の功德を廻向し、彼らに随喜させ、守護を願っている。

日常の寺院参拝や簡略な折には、仏教徒は寺院に灯明用の耶子油や線香や花びらを持参して三種の支提に供え供養を行なっている。然し、毎月の満月祭 (pōsa) や特別な折には供養の爲の一連の偈頌が僧俗によって誦せられる。

正式の法要、即ち先祖供養や地鎮祭の折には、在家者の家に比丘が招かれ徹夜のパリッタ誦誦と翌朝昼の比丘・沙弥への施食がなされている。この法要とは又別の儀式が供養であろう。

供養の儀式は三種のうち特に菩提樹と仏像に対して行なわれ、仏塔供養はあまりなされていない。

中でも菩提樹供養は、個人的な祈願のみならず、国家鎮護や雨乞い等のために国家行事として、宗教を重視するスリランカ政府によっても行なわれている。これは、菩提樹が仏陀の受用物であったからだけではない。鳥の翼等によって運ばれて一人生えしたものと等以外の菩提樹は神聖なものであって、^④ 神々が宿るとされているからで

ある。菩提樹に対する樹神信仰はスリランカ独自のものではない。菩提樹 (Bodhi-rukha、或いは単に Bodhi) は仏陀の覚り以前はアシヌヴァッタ (Asvattha, Pali: assattha) と呼ばれ、アタルヴァヴェーダ、サタパタブラーフマナ、チャーンドーグヤウパニシャッド等に神樹として扱われていたことが、リリー・ダ・シルワー博士によって明らかにされている。また菩提樹の葉の文様は更に先史時代のインダス文明にまで逆のぼり、ハラッパ遺跡の墓地から出た壺にもこの葉の文様があり、古代からアシヌヴァッタ樹が礼拝の聖なる対象であったと述べられている。^⑤ パーリ經典中にも、樹神信仰は認められる。中部にはサーラの樹に棲む樹神 (rukha-devata) が登場し、ミリンダパンハにはパラサ樹とパンダナ樹に棲む樹神が登場する。^⑦ 律中には、植物を伐ると波逸提であるという項目が立てられた由来について、伐られた樹の樹神を登場させている。^⑧ 各種のジャータカからは、樹神がニグロダ (バンヤン) の樹の梢やうろに自分達の子供と棲んでいること、人々が彼らのために樹の根もとに施食をなし、樹神はそれを貰う代わりに人々を守護すること、などのことが知られる。^⑨

時代が下がると考えられるミリンダパンハやジャータ

カ以外でも、初期經典とされるダンマパダや、中部からは、樹のところろに支提(ceṭiya)が作られていたことが知られる。ここでの支提は前述の三種の支提とは異なり、中部には怖畏を与える処として掲げられているが、神の供養のために作られた築山の如きものであったかと考えられる。^⑩

以上のような經典から、パーリ仏教においても樹神はその存在を無視されてはいなかったことが知られよう。

元来、民間信仰の中に生きていた樹神信仰は、パーリ仏教の中でもその地位を認められてきたのであろう。

菩提樹(Bodhi-rukka)がアシヴァッタ樹であることは、長部や島史から知られる。^⑪ゴータマ仏はアシヴァッタ樹下で悟りを開いたが、過去の諸仏は、ヴィパッシー仏がパータリー樹、シキ仏がブンダリーカ樹、ヴェッサブー仏がサーラ樹、カクサンダ仏がシリーナ樹、コーナーガマナ仏がウドゥンバラ樹、カッサパ仏がニグローダという様に、各別の樹下で悟ったとされている。律には植物の伐採が波逸提であるとされていたが、ここでの植物中の樹木にはアッサッタ、ニグローダ、ピラッカ、ウドゥンバラ、カッチャカ、カピタナといった名が挙げられて、アシヴァッタが現実の樹木名であることが判る。^⑫

大史では、菩提樹の将来より遙か以前、仏陀自身の三度のセイロン島訪問の伝説の二度目にあたるナーガ・デーパ訪問の際、仏陀が、島の利益のために、ラージャーヤタナ樹と、そこに棲んでいた神を連れていったことが記されている。

現在のスリランカでは、コホンバ樹やヌガ樹(ニグローダ)の樹神への礼拝がなされている。ラージャーヤタナ樹は菩提樹の如く呼称であると考えられ、樹の種類は定かではないが、スリランカでも古来より樹神信仰が伝統的であったと考えられる。

菩提樹たるアシヴァッタ樹についても、地の樹と同様、神々が棲んでいると見做されるのは当然であろう。樹神信仰の対象であったアシヴァッタが、仏陀の悟りの為の受用物たる菩提樹として礼拝の対象となり、パーリ仏教、スリランカ仏教の中で特に重要な位置を占めてきたことになったと言えよう。

スリランカでの菩提樹供養については、大史や島史によれば、セイロン島へ将来された時から行なわれていた。その供養の方法については、島史では、大菩提樹がセイロン島に到着した時、諸天や諸龍が大菩提樹をとり囲んで、種々の蓮やその他の華を雨降らして供養し、王らは

華鬘や香で供養したとされ、大史でも、人々が香や華で供養したことが記されている^⑭。然し、供養の具体的な方法は明らかではない。大史では、後にバーディカ・アバヤ王の時に菩提樹の灌水供養 (Bodhi-sinana-puja) が行なわれたことが記されている^⑮。

現代のスリランカでの菩提樹供養 (Bodhi-puja) では、灯明・線香・花びらを供える他、灌水もなされている。壺に入れて頭に頂いてきた聖水を菩提道場 (菩提樹の敷地) の四方に灌ぐのである。あるいは、削ったココナツの胚から搾り取った乳化液で煮た米 (キリ・パットゥ、乳飯) も備えられる^⑯。あるいは特にアマラーダプラの大菩提樹には種々の色彩の短い矢羽形の旗が万国旗のように飾られる^⑰。

これらとは別の正式の菩提樹供養の仕方とされるものが見葉に記されている。それによれば、

菩提樹のまわりの庭を掃除する。瀧過したきれいな水に白い香料、サワンダラー (sāvāṇḍarā)、ジャスミンの花の汁を入れた水の壺を七つ用意する。その水を少々、菩提道場と、花を供える台の上とに撤く。菩提樹庭に、二十一枚のブラットゥの葉を三つ^⑱の花の形にして一列に並べる。菩提樹庭の四限にコ

コナツの花を生けた水がめを四つ安置して、ヴェィシユヌ、カタラガマ、サマン、ヴィビーシヤナの四神のためにギーオイルの灯明を四つ点す。そして、先の蓮形のブラットゥの葉の中央のものにココナツオイルの灯明を七つ点し、右側のマハー・デーヴァ (シヴァ神) のマンダラに七つ、左側の九曜のマンダラに九つのギーオイルの灯明を点す。香料の入った水一つずつ頭の上に載せて、菩提樹を右邊三巾して灌水する。白い花の華鬘や、白黄二色の旗を七つ連ねたものを菩提樹に掛け、蓮の花を七つ供える。菩提樹庭の灯明の点されたブラットゥの上に、赤・青・黄・白の花と九種ほど置き、そこで樟脳を焚く^⑲。以上のことを水曜日か土曜日に始め、一週間毎日続けると良い^⑳。

この様な厳密な供養は現在では行なわれていないが、見葉に記録されていることから、以前は実際に行なわれていたであろうと思われる。ここに見られた様に、菩提樹そのものだけではなく、神々や星宿にも礼拝がなされている。又、三や七という数は、それ自体が神秘的であるとされている。

ダンマパダによれば、元来、樹支提に帰依しても、一

切苦から脱れるための三宝のような安穩で最高の帰依処とはなり得ないとされたものであり、中部で言われたようにに怖畏すべきものの一つであったのである^⑤。

仏陀の悟りによって、アシヴァッタ樹は仏教徒からの正統の礼拝の対象としての地位を得た。それと同時に仏教以前からの樹神信仰も改めて定着したかと考えられる。菩提道場が地球の臍であるという注釈書時代以降の発想がウパニシャッドや民間信仰の響影であることをダ・シルワー博士が指摘されるが、他の民間信仰的色彩も後代には強くなったであろうことを想像するに難くない。

次に、仏像供養 (Buddha-pūjā) について。大史によれば、アショーカ王がマハーカラ龍王に頼んで化作して貰った、三十二相八十随形好を具えた仏像に対して、眼供養 (akhi-pūjā) ということを行なうたとされている^⑥。眼仏供養 (Buddha-pūjā) の語は、大史中ではマハーヤサ王が行なったとして見られる。然し、供養がどのようにして行なわれたかは明らかではない。

現在は仏像は普通、仏堂内に安置されており、満月祭 (pōya) の日や、寺院で指定する特定の曜日には、仏像供養が行なわれる。仏塔や菩提樹には、各自名々が随時参拝するが、仏殿では定時に集合し、一定の順序を以って

仏像に対する供養が行なわれている。菩提樹供養は広く一般的なものであったが、仏像供養も寺院での最も一般的行事であると言えよう。仏殿に集まった在家仏教徒は、比丘の導唱と共に偈頌を唱和し、続いて種々のものを以って供養を行なう。供養される物は銘々が供えるのではなく、予め比丘や沙弥によって集められ、一列に並んだ仏教徒に順次手渡され、仏像の前の比丘によって供えられてゆく。これは、各人の供養としてではなく、参拝した皆の者が貴賤貧家の差を越えて同等の資格を以て供えることを表わしている。

供養の際に唱和される偈頌は統一されてはいないが例えば次の如くである。

Namaskāraya 礼拝

Namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddha-
ssa.

彼の世尊・阿羅漢・正等覺者に礼拝

(三回繰返し)

Tisarāṇa 三帰依

Buddhaṃ sararaṃ gacchāmi,

Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi,

Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi,

Dutiyam pi 以下同右

Tatiyam pi 以下同右

我は仏に帰依す、我は法に帰依す、我は僧に帰依す。
再び、(以下同じ)。三たび、(以下同じ)

Pansil 五戒

1. Paṇātipatā veramaṇi sikkhāpadam samādiyāmi.

2. Adinnādānā veramaṇi sikkhāpadam samādiyāmi.

3. Kāmesunicchācārā veramaṇi sikkhāpadam samādiyāmi.

4. Musāvādā veramaṇi sikkhāpadam samādiyāmi.

5. Surāmerayamajjapamādaṭṭhānā veramaṇi sikkhāpadam samādiyāmi.

一、殺生を離れる学処を我は遵守す。

二、不与取を離れる学処を我は遵守す。

三、欲邪行を離れる学処を我は遵守す。

四、妄語を離れる学処を我は遵守す。

五、穀酒・果酒とて酔わせ放逸の原因^{べゐるもの}を離れる学処を我は遵守す。

Buddh Vandima 仏陀の礼拝

1. Iti pi so bhagavā araham sammāsambuddho

vijjācaranāsampanno sugato lokavidū anuttaro

purisadammasārathi sattho devamanussānaṃ

buddho bhagavā, ti.

このように又、彼の世尊、阿羅漢、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上の調御丈夫、天人中の師、仏、世尊は……^ご。

2. Buddham jivita-pariyantaṃ saraṇaṃ gacchāmi.

生命の終焉^{まじ}私は仏陀に帰依する。

3. Ye ca buddhā atitā ca,

ye ca buddhā anāgatā,

paccuppannā ca ye buddhā,

ahaṃ vandāmi sabbaḍa.

過去の諸仏と未来の諸仏と現在の諸仏とに私は常に礼拝する^ご。

4. Natthi me saraṇaṃ aññaṃ,

Buddho me saraṇaṃ varaṇaṃ,

etena sacca-vaḥjēna,

hotu me jayamaṅgalaṃ.

私には他の帰依所は無い。私には仏陀が最高の帰依所である。この真実の言葉によって、私に勝利の幸福があれ。

5. Uttamaṅgena vandehaṃ,

pādaparaṃ suvaruttamaṃ,

Buddhe yo khalito doso,

Buddho khamatu taṃ mamaṃ.

私は頭を以て、最高の黄金樹〔たる仏陀〕を礼拝した。仏陀に対する迂纏な過ちは、仏陀はこれを私に許し給え。

Dharmaya Vandima 法の礼拝

1. Svakhāto bhagavato dhammo sandīḥhiko akā-

hiko ehipassiko opanayiko paccattaṃ veditaḥbo

vināhi' ti.

世尊によつて善く説かれた法は、現実のものであり、時間に制限をせず、「来たれ見よ」のものであり、「我々を」導くものであり、智者が各々知るべきものである。

2. Dhammaṃ jivita-pariyantaṃ saraṇaṃ gacchā-

mi.

生命の終焉まで私に法に帰依すべし。

3. Ye ca dhammā atitā ca,

ye ca dhammā anāgatā,

paccuppanā ca ye dhammā,

ahaṃ vandāmi sabbaḍā.

過去の諸法、未来の諸法、現在の諸法に、私は常に礼拝すべし。

4. Natthi me saraṇaṃ aññaṃ,

dhammo me saraṇaṃ varaṃ,

etena sacca-vajjena hotu me jaya-maṅgalaṃ.

私には他の帰依所は無い。私には法が最高の帰依所である。この真実の言葉によつて、私に勝利の幸福があれ。

5. Uttamaṅgena vandehaṃ,

dhammaṃ ca tividhaṃ varaṃ,

dhamme yo kalito doso,

dhammo khamatu taṃ mamaṃ.

私は頭を以つて、最高の三種の法を礼拝した。法に対する迂纏な過ちは、法はこれを私に許し給え。

Saṅghāya Vandima 僧伽の礼拝

1. Supatīpanno bhagavato sāvakasaṅgho,

ujjupatīpanno bhagavato sāvakasaṅgho,

nāyapatīpanno bhagavato sāvakasaṅgho,

sāmicīpatīpanno bhagavato sāvakasaṅgho,

yadidaṃ cattāri purisayugāni atthapurisapu-

ggalā esa bhagavato sāvakaśaṅgho āhuneyyo

pāhuneyyo dakkhineyyo añjalikaraṇiyo anuttaraṇaṃ puññakhettaṃ lokassa' ti.

世尊の弟子僧伽は、妙行者であり、質実な行者であり、真理〔を求め〕る行者であり、方正な行者である。即ち、四雙八輩のこの世尊の声聞の僧伽は、供食され、献上され、施され、合掌されるにふさわしく、世間での最高の福田である。

2. Saṅghaṃ jivita-pariyaṇaṃ saraṇaṃ gacchāmi.

生命の終焉まで私は僧伽に帰依す。

3. Ye ca saṅghā atitā ca,

ye ca saṅghā anāgatā, paṭisaṅgāyaṃ paṭisaṅgāyaṃ paccuppannā ca ye saṅghā, so saccatthimā ahaṇaṇaṃ vandāmi sabbadā.

過去の僧伽と未来の僧伽と現在の僧伽とに私は常に礼拝する。

4. Natthi me saraṇaṃ aññaṃ,

sāṅgho me saraṇaṃ varaṇaṃ, etena saccavajjena hotu me jayamaṅgalaṃ.

私には他の帰依所はない。私には僧伽が最高の帰依所である。この真実の言葉によって、私に最高

の幸福があれ。

5. Uttamaṅgena vandehaṃ,

Saṅghā ca tividdhotamaṃ,

sāṅgho yo kalito doṣo,

Saṅgho khamatu taṃ mamaṃ.

私は頭を以て、三種の最高の僧伽を礼拝した。僧伽に対する迂濶な過ちは、僧伽はこれを私に許し給え。

三宝帰依

1. Namāmi Buddhaṃ guṇasāgaran taṃ,

sattā sadā hontu sukhi averā,

kāyo jiguṇeco sakalo dugandho,

gacchanti sabbe maraṇaṃ ahaṃ ca.

徳の全大洋たる仏を私は礼拝する。衆生よ、常に幸福で怨みの無い者であれ。肉体は厭うべきものであり、全て悪臭を持つものである。あらゆるものは死に至る。我もまた。

2. Namāmi dhammaṃ Sugatena desitaṃ,

sattā sadā hontu sukhi averā,

kāyo jiguṇeco sakalo dugandho,

gacchanti sabbe maraṇaṃ ahaṃ ca.

善逝にちつて説かれた法を礼拝する。(以下同文)

3. Namāni saṅghaṃ munirājasāvakaṃ,

sattā sadā hontu sukhi averā,

kāyo jiguccho sakalo dugando,

gacchanti sabbe maraṇaṃ ahaṃ ca. ⑤

賢人の王たる僧伽を私は礼拝する。(以下同文)

以上のような偈頌を以て三宝に礼拝したあと、供養の

偈が誦せられる。

Pahaṇ Pūjāva 灯の供養

1. Ghaṇasārappadittena, dipena tama-dhaṇṣiṇā,

tiloka-dīpaṃ sambuddhaṃ, pūjāyāmi tamonu-

dam.

檀脳に点された闇を破る灯を以て、闇を破った三

界の灯たる正覚者に私は供養する。

2. Mahandhakāraṃ dhaṇṣetvā,

satte dukkhā pamocayī,

tassa Buddhass' imaṃ dīpaṃ,

pūjemi mananandanam. ⑤

真黒闇を破り、衆生を苦から解放した彼の仏陀に、

このこの喜びしき灯を私は供養する。

Suvanda Pūjā 香の供養

Sugandhi-kāya-vadanam, ananta-guṇa-gandhinam,

sugandhinahaṃ gandhena, pūjāyāmi tathāgataṃ.

芳香ある身・語があり、無辺の徳の芳香がある如来

に、私は芳香ある香を供養する。

Suvanda Dum Pūjāva 線香の供養

Gandha-sambhāra-yuttena, dhūpenahaṃ sugandhi-

nā, pūjāye pūjānyan taṃ, pūjā-bhājanam uttamaṃ.

香の要素を具えた芳香ある線香を以て、最高の供養

の器たる供養すべき人に、私は供養する。

Pān Pūjāva 水の供養

Adhivāsetu no bhante, pānyam parikappitaṃ,

anukampam upādāya, paṭigandhātumuttamaṃ.

導師とお受け下さる、準備致しましたこの水を、哀

惑して手に取り、お受け取り下さる。

Khāra Pūjāva 食物の供養

前掲偈中の pānyam (水) の代わりは bhōjanam

(食物) が入る。

以下同様に、Kānda (yāgu) Pūjāva 粥の供養では、

taralaṃ (米粥) に Avulupat Pūjāva 菓子の供養では

khajjākam (硬食) に Vyañjana Varga Pūjāva 副食

の供養では vyañjanaṃ (副食) に Gilampasa Pūjāva

紅茶の供養とは *gīlanapaccayam* (医療品) に *Behet Pujāva* 薬の供養 又は *besajjam* (藥) に *Bima Pujāva* 飲物の供養 又は *pānakam* (飲料) に *Bulat Pujāva* キンマの葉の供養 又は *tambūlam* (キンマの葉) に置物を換えて誦せられる。

Ahāra Pujāva 食物の供養 (1)

samaccham esam saphalam sakhajjakam,
subhojanam dan Munino anomakam,

sagaravenehi yājāmi sādhuṅkam,
bhave asesaghā-vināsa-huttukam.

魚や果実や硬食の入った、牟尼に捧げられた最高の美味な料理を、おもな尊敬を以て十分に私は供養する。(煩惱の) 完全な破壊と消滅のための供養となること。

Dāhāt Pujāva キンマの葉の供養 (1)

Nāgavalli-dālūpetam cuṅṅapūga-samāyutam,
tambulam patigānhatu, satam puḥemidam jinam,
ナーガヴァッリーの葉と、くだいたアレカナッツとを一緒にした、百枚のキンマの葉を受けられ、私は勝者に供養する。

Pavan Pujāva 風の供養

Vandanamāno sakkāro, bhajanam sakya-puṅgarā,
manuñña-pavanaggāhi, vijānenahi pūjaye.

礼拝し恭敬し、釈迦族の最高者に仕え、人気の無い快き最高の風と私は供養しよう。

Cāmara Pujāva ちまわの供養²⁰

Tiḷokattilakam buddham, siddham suddha-guṇākaram,
mahārahena sugatam, pūjaye cāmarenaham,
三界の主であり、淨らかな徳を蔵して完成された佛陀、善逝に大いなる価値のあるちまわを私は供養しよう。

Gaṇṭhāra Pujāva 鐘の供養

Gaṇṭhāravānukārena, sarena madhurena yo, sādhammam desayi satthā, tayabhi gaṇṭhābhi pūjaye.

鐘の音に似た妙なる声で正法を説かれた師に私は三打の鐘を供養しよう。

Malwalata Pān Isina Gāhava 花の沐浴の偈

Sincitam suddham udakam, puppham vaṇṇa-guṇam yutam, sambuddhomhi pūjemi, bhaveyya tenaham sukhi.

淨らかな水を撒いた、色と香りを具えた花を正覚者

に私は供養する。それによって私に幸福がありませう。

Mal Pūjākaraṇa Gāthāva 花の供養の偈

1. Pūjemi buddhaṃ kusumena nena,

pupphaṃ me tena ca hotu mokkhaṃ,

pupphaṃ mlāyāti yathā idam me,

kāyo tathāyāti vināsa-bhāvaṃ.

私はこの花を仏陀に供養する。その福によって私に解脱あれ。この花がしおれるように私の身体も同様に滅に至る。

2. vaṇṇa-gandha-guṇopetaṃ etaṃ kusumasaṅgataṃ, pūjayāmi munīndassa, siripāda-sarorūhe.

色と香りと美しさを具えたこの多くの花を、牟尼王の聖なる蓮華の足もとに私は供養する。

3. Paṭiccha bhagavā nāha, pupphaṃjalīṃ idam mama, padumuppala-kalhāra, vassiki-sumanā-dikarū.

世尊よ、主よ、私のこの紅蓮華、青蓮華、白蓮華、ジャスミン、大輪のジャスミンの花の合掌を受けられよ。

Gase Tibyadī Mal Pūjāva 樹の花の供養

Kusumaṃ phūlitam etaṃ, paṅgahetvāna añjalim,
Buddha-seṭṭham sarivāna, akāsemapi pūjāye.

この咲いた花を合掌おせつ最勝の仏陀を憶念して空
中にも私は供養しよう。

Sivuru Pūjāva 衣の供養

Koseyākādi-jātena, kuṅkumāratta-kantīnā, tīci-
varena bhāgavantam, acchādemi tathāgataṃ.

絹などの材料を使いターメリックで染めて織った三
衣で私は世尊をお包みましょう。

Āsana Pūjāva 坐具の供養

Nānā-maṇi-suvaṇṇehi, khacitam cāru-bhāsuram,
mahārahaṃ idam sādhu, āsanaṃ demi sathhuno.

種々の宝珠や黄金をちりばめ、美しく輝いたこの大
いなる価値ある坐具を私は師に捧げやす。

以上の如く、その場合に……して種々の供養の偈がある。
このあと、以下に続く。

Vārādi Samākaragānima 謝罪

Kāyena vācā cittena, pamādena mayā katam,
accayaṃ khama me bhante, bhūripaṇṇa Tathā-
gata.

身・語・意によってなされた私の不放逸、私の罪を

導師よ、廣大慧の如来よ赦し給え。

Deviyanta Pindima 神々々の功德の施

Sabbadevā anumodantu, sabbasampatti-siddhiya,
Sabbabhūta……, Sabbasattā…….

全々の天人は随喜せよ、一切の幸福のために、全ての地祇、全ての衆生は(以下同じ)
これには又、別の形もある。

1. Akāsathā ca bhūmmatthā, devā nāga mahi-
ddhikā, Puññaṃ taṃ anumodantu, ciraṃ rak-
khantu sāsanaṃ.

空中、地上にある天・龍・力強き者らよ、この福を随喜して、永く教法を守護せよ。

2、3は sāsanaṃ (教法) が desanaṃ (説示) と
maṃ paraṃ (我と他人) に置きかえられる。

Nātanaṃ Pindima 先祖への功德の施

Idaṃ me nātanaṃ hotu, sukhiṭhā hontu nātayo.

この私の「功德」は先祖のためになれ、先祖達は幸福であれ。

以上の如き一連の偈は、Vandana Gāthā (礼拝の偈) と呼ばれ、小児が日曜学校で最初期に習うものである。

三帰・五戒に次いでスリランカ仏教徒にとって最も一般

的なパリーはこれらの礼拝偈である。

供養 (pūjā) の語源は√pujで尊敬の意味である。パリー經典中では、sat-√kr (恭敬) garu-√kr (尊重) maneti (奉事) と並べて用いられている。注釈書時代以降になってからでも、Upasakajanalanakāra に、十福行事中の apacāya (尊敬) について、「Apacāya とは pūjā によって敬う (samīcim karoti) から」とされている^④。

然し、礼拝偈からは、尊敬の意義を離れ、仏陀の随念や、自己の観察の手段にも成っていることが判る^⑤。

スリランカで非常に一般的な供養は、民間信仰の方法となつて現世利益を願う手段にもなったが、一方、誦せられる偈には、積極的な意義が込められている。礼拝偈等の出典も明らかではなく、比較的新しいものと考えられる。タイやビルマの仏教と関連も詳かではない。然し、現代スリランカの仏教の様相を知る上では、供養の実際と、誦せられる偈とは興味深いものを持っている。

註

① 例えば、コロンボ市内のヴァジラーラーマヤがある。当寺院には、外国からの留学僧がよく居留し、啓蒙の意味もあつて托鉢がなされていると言えよう。

② cf. Mūhinda paṇṇa p. 341.

③ 拙稿『随喜』印仏研三十四卷二号参照。

- ④ スリランカの寺院の菩提樹は全てアマラーダプラから頒けられたものであるとされる。
- ⑤ “THE CULT OF THE BODHI TREE: Its Antiquity and Evolution” by Lily de Silva, KANDY, 1978.
- ⑥ M. i, p. 306.
- ⑦ MII, p. 173.
- ⑧ Vin. iv, p. 34.
- ⑨ J. i, pp. 169, 328, 405, 423, 442; ii, pp. 357, 439; iii, pp. 23, 24, 343; iv, pp. 154, 474; v, p. 511.
- ⑩ Dhṛp. v. 188 “Bāhūn ve saraṇa yanti, pabbatani vanāni ca, āraṇa-*rukḥha-cetyāni*, manussā bhayatajjitā. M. i, p. 20 “……tathārūpasu rāttisu yāni tāni āraṇa-cetyāni vana-cetyāni *rukḥha-cetyāni* bhisanakāni salomahamsani tathārūpesu senāsanesu vīhāreyyāni appeva nāma taṃ bhayabheravaṃ passeyyān”.
- ⑪ D. ii, p. 4; Dv. § 17, vs. 16-22.
- ⑫ Vin. iv, p. 35.
- ⑬ Dv. § 16.
- ⑭ Mv. § 19, v. 49.
- ⑮ B. C. 22~A. D. 7.
- ⑯ Mv. § 34, v. 58.
- ⑰ 普通の水に白檀の粉を入れるなどして浄めたもの。
- ⑱ 灌水は単に供養のためのみならず、雨乞いの為にも行なわれる。これは仏教以前の信仰に逆のほると見られる。
- ⑲ キリ・ハットウは栄養価の高い食物とされ正月や慶時に作られる。

- ⑳ この旗は、スリランカ仏教がブッダガヤの菩提樹に参拝した時にも奉獻されている。
- ㉑ 香草の一種でカスカス草 (cuscus, khuskus) のこと。根が芳香を持つので、これを広げて縁を止める柄付けつちわ状のものを作り、部屋にかけられる。
- ㉒ キンマの葉で、南アジアで嗜好品として、タバコや石灰やアネカ耶子の実などと共に咬まれるもの。スリランカでは、敬意の象徴として用いられ、正月(四月頃)には、この葉を束にしたものが子から親に贈られる。
- ㉓ スリランカでは星宿信仰は盛んであり、各人の運勢の暦が誕生時に正確に作られ、結婚等は全てこの暦に基づき方位と時刻が決定される。
- ㉔ 樟脳も又、香料の一種として用いられる。
- ㉕ “Simhala gi sahita Pirite Deśanā saba Bodhi Pūjāva”, p. 71. ed. by Hanvālle Kalyāṇavaripa, Colombo, 1981.
- ㉖ cf. ㉑ Dhṛp. vs. 189, 190 “Netaṃ kho saraṇaṃ khemaṃ, netaṃ saraṇamuttamaṃ, netaṃ saraṇamā-gamma, sabbadukkḥā pamuccati. Yo ca buddhaṃ ca dhammaṃ ca, sañghaṃ ca saraṇaṃ gato, cattāri ariyasaccāni, sammāpaññāya passati.”
- ㉗ 注⑤回書 p. 17.
- ㉘ Mv. § 5, vs. 91-94.
- ㉙ *ibid.*, § 33, v. 68.
- ㉚ これら、阿羅漢から世尊迄を仏の九徳と呼んでいる。ニカーヤからの引用であるが、必ず冒頭の *Iti pi* と末尾の *ti* とを附する理由は明らかではない。また簡略化されて、2

以下が省略されることもある。

⑭ この部分は、A. ii, p. 56. 等から引用されたものである。
末尾の *va* は附随したままである。

⑮ 三種とは、過去・現在・未来か。

⑯ この部分は A. ii, p. 56. の前項の記述に続く箇所からの引用。

⑰ ここの二の三種も、過去・現在・未来か。

⑱ 衆生 (*satta*) は特に死者の霊や夜叉等を指す。

⑳ これらの三偈は、先の仏法僧の禮拜の偈の各最後に付されることもある。

㉑ 第二偈は省略されることもある。

㉒ *camara* は、私干でもあるが、スリランカに於ては、童子は実用的なはたきのみであり寺院では大小のうちわが裝飾や説法用に用いられている。

㉓ 第二、第三偈は屢々省略される。

㉔ かの (*tam*) のかわりに *no* (我々の) とするものもある。

㉕ *me* (私の) の代わりに *vo* (我々の) も用いられる。

㉖ 日曜学校 (*Daham pasala*, *Dharma-school*) が大歳と十歳で禮拜偈を唱へ、以後ニリマタ等を唱へる。

㉗ V. i, p. 229; ii, p. 255; M. i, p. 29; A. ii, p. 70; v, p. 248.

㉘ Uj, p. 285.

㉙ この点から A. K. Dharmadāsa 博士は、供養を修習 (*Bhāvānā*) の一種として捉えている。(一九八五年九月十日、大谷大学への講演の博士の原稿より)

本稿への偈の収録のために参照したものは次のとおり。

“Baudha Ādahilla,” ed. by Guṇasiri Prakāśakayo, Colombo.

“Sīṃhala gī sahita Pirit Deśanā sāha Bodhi Pūjāva,” ed. by Hanvālle Kalyāṇavanṣa, Colombo, 1981.

“Sīla Bhāvanā Vandana” ed. by Maḍḍhe Pañāsīla, Sāsana Sevaka Samitiya, Maharagama, 1981.

“Pāvīdi Maga nohot Sāmanera Baṇa daham pota,” ed. by Attudave Rahula and Ahangama Dharmārāma. Gangārāma, Colombo, 1978.

“Pāli Sīṃhala Pirit Pota,” ed. by Kiriḥattudave Dharmakīrti, Vidyaṅkārā Yantirāya, Kālanīya, 1954.

“Pirit Pota,” Deśiya vaidyaṃātāyāṣye prakāśanayaki, Sri Lanka 出版局 Colombo, 仏曆 2529.

“Baudha Ādahilla,” ed. by Kiriālle Nāṅavimala, Guṇasena, Colombo, 1983.

“Bodhi Pūjāva” by Rerukāṇē Candavimala, Colombo, 1983.

“Budḡuṇa Bhāvanāva” by Nālayane Ariyadhanna, Colombo, 1985.

“Subodha Buddha Ādahilla” by K. V. J. Guṇasekara Colombo, 1984.

“Daham Pasala,” vols. 2-6, 仏教青年協会 (YMBA), Colombo, 1977-1985.

“Paritta” Spolia Zeylanica vol. 36., pt. 1, by Lily de Silva, the National Museum, Colombo, 1981.

'The Religiosity of Buddhists in Sri Lanka through Belief and Practice,' by W. S. Karunatilake, "Religiosity in Sri Lanka," ed. by John Ross Carter, Marga Institute, Colombo, 1979.
"The Mirror of the Dhamma," by Nārada and Kassapa, Vajjarana, Colombo, 1st. ed. 1926, 5th ed. 1956; re-ed. by Kassapa, 2nd ed. 1975; revised ed. by Khantipalo, Kandy, 1963, 3rd re-ed. 1980.

"Paritapāṭi," Jambūdīpa-vihāra 住の大長老によつて誦せられたもの。ブルマ仏教協会出版部、1957.

以上の資料からは、ブーシャーに誦せられる礼拝の偈(vandana-gāthā)の起源は明らかではなう。これらの偈の記された国立博物館やメーラーデニヤ大学所蔵の貝葉は十八世紀以降のものに見られるが、それ以前の状況について興味を持たれる。